

書くことに生きがいを感じて

小野崎 啓太さん（二十九歳）

●**昨年、第六十六回毎日書道展で毎日賞受賞。また、今年三月には個展を開催するなど、精力的に活動されている小野崎啓太さんにお話を伺いました。**

●柿沼先生との出会い

六歳の時に母親のすすめで、柿沼翠流先生の書道塾に通い始めました。柿沼先生との出会いは、「人として、芸道を行くもの」として、いかに生くべきか、その後の人生で大きな指針となっています。

二〇〇二年、一六歳の時、

手島右卿が創設した独立書展に初出品し、佳作・ヤング賞を受賞しました。漠然とした将来を思う中で、芸術に携わりたいと考えていました。これが「書」と思うようになるのは、まだまだ先のことです。

●初の個展開催

二〇〇四年、大東文化大学に入学。書を学ぶ傍ら、中国文学を専攻しました。図らずも大学の書道部に入部することになり、



全国から集まった書道を志す友人たちと大学

時代を過ごしました。

在学中の個展開催を決意し、費用となる百万円をアルバイトで捻出。大学時代は授業、アルバイト、臨書の日々でした。

二〇〇七年に埼玉県志木市にて、個展「抱炎展・放熱の証」を開催し、二十数点の作品を展示、約二百名の方々をお迎えしました。



20代最後の個展

二十代最後となる今年、一つの節目、ケジメとして開催しました。六日間の開催で、六百一名という多くの方々にお越しいただきました。ありがとうございました。

二〇〇八年、第五十六回独立書展独立賞最高賞を最年少の二十二歳で受賞。雅号を「抱炎」として大学時代に活動していたので、大学最後となるこの年は「抱炎」と書いて出品。その字の通り「炎を抱く」の意味。公募最高賞を受賞したために、その後は本名を使うことにしました。

●「書」は育まれていくもの

現在、黒磯南高校で、書道と国語を教えています。

今年三月、栃木県総合文化センター第四ギャラリーにて二度目の個展を開催し、五十点の作品を展示しました。

「書」は、ひとりではできません。育み、育まれていくものです。一つの芸事に生きることとは、簡単なことではありません。

今年毎日書道展に応募した作品が入賞すると、七月に国立新美術館で展示されるそうです。

(K・H)

「元気のヒケツ」は

●このファミリー展を
開催されたきっかけは？

矢板市には立派な郷土資料館があるのに、来館者が少ないのはどうしてだろうと、思っていました。

多くの人が興味を持つ展示をすれば来館者が増えるのではないかと考え、矢板生まれの渡邊

昨年九月に矢板市立郷土資料館で開催された「渡邊ファミリー展」には展示期間十六日間で八百五十二名もの来館者があり、資料館オープン以来最多記録を更新しました。

この作品展には、下伊佐野の渡邊和昭さんとその兄弟、そして甥や姪など十人による六十点の作品（油彩、切り絵、ポスター、水彩、ステンドグラス等）が展示されました。

そこで、芸術家一家の五男・和昭さんからお話を伺いました。

「三兄弟の年齢を合計すると二百五十二歳になります。元気のヒケツは？」

一つは何事にも興味

チャレンジ精神を忘れない 渡邊 和昭さん（81歳）

●他にはどういった活動をしていますか？

矢板市文化協会理事と泉地域ふれあい祭の実行委員会副会長、それに下伊佐野長生会会長とシルバー大学北校二十一期会会長、また地元で切り絵や石絵の指導をやっています。

●今後の抱負は？

皆さんと手をつなぎ、いろいろな分野で協力しながら、矢板市を元気にしていきたいと思っています。

(T・S)

